嘘

中邑あつし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
嘘

【Ｎコード】
Ｎ２０２２ＢＡ

【作者名】
中邑あつし

【あらすじ】
誰もが多少なりとも、自分を見て欲しくて嘘をついたことがあると思います。それが、いきすぎちゃった人の話です。
男性の方は、男性視線で、女性の方は女性視線で捉えてください。

今日もまた、嘘をついた。

いつから、それが当たり前になったのだろう。

自分が嫌いだった。だから、自分のことを好きになる人など現れないと思った。傷付くのが怖くて、人を愛しても、自分に嘘をついた。それは、愛じゃないと。だが結局、叶わぬ想いに独り涙に濡れ、誰より傷付いていた。

些細なことでがむしゃらになった。必死に生きていた。何でも卒なく熟す人が羨ましかった。ただ、自分は、不器用でがむしゃらに生きていくことしか出来なかった。

自分が嫌いだった。そのくせ、情けないほど、自己愛に執着していた。傷付くのを恐れ、そして、自分に甘えた。自分に逃げていた。

変えようと思った。自分のことを愛してもらえるように。自分の愛した人が望む自分であるように。

偽るつもりはなかった。自分を変えたかっただけだ。自分に自信が持てるように。自分を好きになれるように。

だけど、今日もまた、嘘をついた。

いつしか、それが当たり前になっていた。

重ねた嘘は、理想の自分を創り上げた。自分の愛した人は、他の誰でもない、自分を愛してくれた。

その愛が、自分から離れていくのが怖かった。もっと、自分を見て欲しくなった。

だから、今日もまた、嘘を重ねた。

この世界で最も愛する人は、皮肉にも、創り上げられた嘘の自分を愛した。それが、自分の求めた形だった。自分の求めた理想だった。

だけど、どうしてだろう。ずっと、空(から)に浸るような切なさが取れない。幾ら、言葉を重ねても、幾ら、身体を重ねても。愛しあっているというのに、束の解(ほつ)れていくような寂しさが拭えない。

その人を誰よりも愛していた。だから、その人の望む服を着飾った。言葉を着飾った。自分を着飾り、心を着飾った。

自分の愛した人は、一体誰を愛しているのだろう。自分は、誰なのだろう。今となっては、もう、本当の自分が分からない。自分の顔が分からない。自分の心が、分からない。

だから、今日もまた、嘘をついた。

自分が嫌いだった。だけど、今の自分は、その好嫌(こうけん)の感情すら感知出来ない。自分が自分でなくなっていく。どれが本当の自分で、どれが嘘の自分なのだろう。

今日ついた嘘は判る。だけど、積み重ねた嘘が判らない。今日の嘘も、いずれ、積み重ねた嘘になるのだろう。

誰か、本当の自分を教えてください。

そして、本当の顔を罵ってください。本当の心を叱咤してくださ

い。

本当は、誰よりも愛していた、本当の自分を見付けてください。

傷付いてもいい。がむしゃらだった、本当の自分を蔑んでください。

それが、生きていくということなのです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2022ba/

嘘

2012年1月5日01時48分発行